会場内の豊岡市と佐渡市の展示ブース

分科会で豊岡の取組みを発表する中貝市長

中国で豊岡の取組みを発信

コウノトリが豊岡を世界と結ぶ!!

10月８～13日にかけて、中国の浙江省と江蘇省で中貝市長をはじめ市内の小学校教諭、県職員、高校生らが豊岡の取組みなどを発表し、高い評価を受けました。

《問合せ》コウノトリ共生課☎21-9017

アジア湿地シンポジウム（AWS）無錫2011で発表

10月11～13日、江蘇省無錫市で開かれた「アジア湿地シンポジウム無錫２０１１」に中貝市長がゲストスピーカーとして出席し、「湿地と観光分科会」で１００人を超える聴講者を前に豊岡の取組みを発表しました。

発表後、座長から「豊岡の取組みは世界的にも有名だが苦労した点は何か」、聴講者からは「豊岡の取組みを世界にどのように広げていくべきか」、「国際的な機関誌などで豊岡の取組みをどんどん世界に紹介してはどうか」などの質問や意見が寄せられました。

「湿地と農業分科会」では、浙江省庵東鎮の高乃権副書記らが、豊岡市などと進めているコウノトリをシンボルとした日中共同の環境教育・農業の取組み事例を発表しました。

ラムサール条約事務局長と対談

豊岡市は、「円山川下流域及び周辺水田」の２０１２年６月のラムサール条約湿地登録を目指しています。中貝市長は、会場内でラムサール条約事務局長のアナダ・ティエガさんに豊岡の取組みを説明し意見交換を行いました。

◆ティエガ事務局長のコメント

・都市開発と湿地保全の両立の分野では豊岡は世界のチャンピオン・シティだ

・コウノトリ育む農法などの環境と経済が両立する取組みは持続可能な発展には不可欠だ

・鳥類の保護は人類の保護にもつながる。そして鳥がその指標にもなりうる

・豊岡の取組みをグッドモデルとして世界に発信し、その経験を共有すべきだ。さまざまな機関やマスコミと連携すべきだ

・来年ルーマニアで開催される第11回ラムサール条約締約国会議（ＣＯＰ11）のテーマは①湿地②観光③レクリエーションの三つであり、豊岡の実践は方向性に合っている　など

豊岡は、今後、取組みをさらに効果的に世界に向け発信していかなければなりません。

山本教諭（右）による授業

ティエガ事務局長（右）に豊岡の取組みを説明

コウノトリが結ぶ環境協力

◆草の根技術協力事業〔JICA（国際協力機構）〕

市と県は、NPO法人食と農の研究所（神戸市）を実施機関に、平成22年度から3カ年計画で、コウノトリをシンボルとする環境教育と、環境創造型農業を介して農村環境の改善につなげる事業を庵東鎮で実施しています。

昨年度は、専門家チームによる現地調査と中国側調査団の豊岡への受入れを実施しました。

◆専門家チームを中国に派遣

庵東鎮モデル校で、環境教育の実践や、環境創造型農業の研修を実施しました。

10月8～10日、7人の専門家チーム（うち豊岡関係者4人）を現地に派遣。今年7月に田植えを実施した水田の栽培状況を調査し、県豊岡農業改良普及センター職員が現地指導を行いました。

水稲の生育状況を調査する岡田課長補佐（右）

加藤指導主事（右）が実験田の生きものを説明

◆豊岡の環境教育が大好評

10日には、庵東鎮中心小学校で、市立城崎小学校の山本考一教諭、県立コウノトリの郷公園の加藤義弘指導主事、県豊岡農業改良普及センターの岡田弥一郎課長補佐の3人が、同小学校の4、5年生80人を前に、コウノトリや水田の生きもの調査などを題材に環境教育の授業を行いました。

山本教諭はコウノトリ野生復帰の経緯などを質疑も交えて授業を進め、加藤指導主事は現地水田の生きもの調査で見つかった生物を紹介。さらに、岡田課長補佐は生きものの見極め方などを実演しながら説明すると、児童たちは大変興味を持ったようで次々に手を挙げて発言。授業を見学していた中国側の教育関係者にも大変好評でした。山本教諭は「コウノトリに代表される豊岡での自然との共生は普遍的なもの。両国の子どもたちに環境の大切さを伝えたい」と話していました。

◆今後の予定

この事業のプロジェクト・リーダーである倉石　寛さん（食と農の研究所理事）は「文化などさまざまな違いがある中で、両国が環境のことを一緒に考えることは大変意義深い。副読本やカリキュラムの内容をさらに協議し、来年8月には完成させたい」と語りました。

児童からサイン攻めにあう山本教諭

コウノトリが結ぶ環境協力が中国でしっかりと根を下ろし、現地の環境改善につながることを期待しています。

ESD（注1）のためのKODOMOラムサール無錫

10月8～10日、「アジア湿地シンポジウム2011」プレイベント「ESDのためのKODOMOラムサール無錫」に、全国から集まった日本代表14人の1人として、豊岡から西浦拓也さん（県立豊岡高校3年）が参加しました。

西浦さんは、これまでも宮城県や滋賀県で開催されたKODOMOラムサールに参加し、コウノトリや豊岡の自然の素晴らしさ、湿地の重要性を訴えてきました。

今回、中国・韓国・日本の3カ国から40人の子どもたちが集まりました。テーマは「持続可能な地球のために、みんなで湿地をサスティナブル（注2）」。参加者らは、中国の湿地を学びながら、自国の湿地の活動を紹介するとともに、交流を通じて持続可能な環境を学習しました。

さまざまな交流プログラムが行われた中で、西浦さんはラムサール条約への登録を目指す「円山川下流域及び周辺水田」の特徴や湿地保全の活動などについて英語で発表。また、中国の湿地と持続可能な環境について考えるグループディスカッションでは、他の地域から集まった小・中学生たちをまとめ、グループワークを進めたり、韓国代表の子どもと英語でコミュニケーションを取って交流を促すなど、子どもたちのリーダーとなっていました。

西浦さんは「今回の交流で改めて人と人の関わりの大切さを実感しました。高校を卒業してからもこの活動に積極的に関わっていきたい」と決意を新たにしていました。

KODOMOラムサールでの成果をメッセージとしてAWSで発表する西浦さん（右）

※注1　ESD…持続可能な開発のための教育　※注2　サスティナブル・・・持続可能な様子